

お伽草子の切支丹シンデレラ  
—「花世姫」「鉢かづき」「姥皮」のモデルと出典の考察—

Christain Cinderella in *Otogizōshi*: Models and Analogues for  
“Hanayo no hime”, “Hachikazuki”, and “Ubakawa”

Chieko Mulhern\*

This paper presents a hypothesis on the origin of the three tales and the influence of Italian Cinderella type detectable in them. Salient points are as follows:

1. The three tales contain internal evidence pinpointing possible historical models, all Christian converts of the daimyo class, who were involved in sensational political incidents affecting the fate of the Jesuit Mission in the early 17th-century Japan.

2. The initial inspiration is ascribable to the dramatic death of Hosokawa Gracia.

3. The three tales show unmistakable affinities to the Italian Cinderella cycle, which features Outcast Noble Heroine without Shoe Incident and Hearth Abode.

4. Predominant are such Italian motifs as Aid (old woman, deity) and Heroine Disguise (old-woman robe, wooden covering).

5. Key motif-complexes of the *Otogizōshi* tales have identical precedents in Italian folk variants.

---

\* イリノイ大学準教授

6. The Westren influence is traceable to the Italian Jesuits stationed in Japan for 1570-1614; and actual authorship is attributable to Japanese lay Brothers active in the Christian Press.

7. Their primary motive was glorification of exemplary Japanese Christians who are reported as martyrs in Jesuit documents.

This paper concludes that these three tales are not folktales that have evolved from native oral lore but rather sophisticated literary legends coauthored by Italian and Japanese Christian missionaries for proselytizing purposes, using Italian tale type and motifs.

私がお伽草子の研究を始めましてから、もう十数年になります。コロンビア大学で修士号を取る時、主任教授のドナルド・キーン先生が「花世姫」はどうかというアイデアを下さったので、お伽草子ジャンルの総合的研究に「花世の姫」の英訳を参考資料として付けた形にして、修士論文を仕上げました。それから数年後に幸田露伴の理想主義分析という全く別のテーマで博士号を頂き、大学に就職したわけです。その間にお伽草子研究の修士論文は上智大学から出ている英文誌「モニュメンタ・ニッポニカ」に載りましたけれど、「花世の姫」の英訳もねかせておいては労力の無駄というような合理主義的精神から、もう一度手を入れ始めましたところ、今度はこちらも修士時代よりはいささか目が開けて物が見えるようになっていた故か、非常に不思議なことに気がつきました。

私がこの論文で扱いますのは、横山重・松本隆信両氏が室町時代物語として編集され、市古貞次先生が中世小説と定義された、お伽草子というジャンルのうち、特定の三つの<sup>タイプ</sup>話型です。つまり地方で採集された民話や素朴な昔

話ではなく、構成的にも手法的にも十分に洗練され、文学作品としての体裁を整えた形で、絵本又は刊本として広範囲に分布されたフィクションに限って、私は考察することになります。外国のシンデレラ研究でも、ペローやグリムなど文学的に完成されたヴァリエントを比較分析するのが、正統派アプローチとして定着している感じです。

また私の本研究では、お伽草子の「花世姫」「鉢かづき」「姥皮」の三タイプが、他の継娘いじめ話とは根本的に違っている、という仮説が中心になります。それで特に昔話や民話とは切り離して考察することが必要なのです。

お伽草子というものは大体に「昔々ある所に可哀そうな女の子がいました」などという設定になっておりまして、年月日、地名、人名とかははっきりしていないものです。シンデレラ話に限ってみましても、ペローの「センドリオン」、グリムの「アッシュェンプツェル」とか、ヒロインの名は灰かぶり、灰娘というニックネームで、父親やプリンスもある国の貴族か王子という程度の大ざっぱな指定しかしていないのが普通です。日本の姥皮系と呼ばれる昔話類でも同じで、固有名詞は殆んどみられないようです。

ところが「花世姫」を見てみますと、ヒロインは母が夢で観音から授った花びらにあやかって、花世とされているのですが、父親は駿河の和田の一族で豊後守もりたか、プリンスに当る宰相は、しうとの所領を継いで丹後守もりいえと名乗るのです。後で述べます「鉢かづき」と「姥皮」ではもっと具体的に人名か地名が指示してあって、これら三話はどう見てもお伽草子よりは伝説のジャンルに近い特徴を備えているのです。伝説となりますと地方の英雄や民俗信仰などを讃美する縁起物が日本では多く、西洋では叙事詩的な歴史物が多いので、これはどちらのケースかと思って調べ始めたわけです。

歴史的な目で睨んでみますと、「花世姫」の設定がおかしいことはすぐ判ります。駿河の豪族が豊後守というのがまず不可能に近く、実は豊後守は大友家が世襲していたタイトルなのです。それに後を継いだ人が豊後守になるならまだしも話の上では筋が通りますけれど、丹後守では変ですし、おまけに天皇又は主君によって任じられたというわけでもありません。どうも納得が

いかなく歴史辞典などひねくり廻しているうちに、とび上りそうになりました。豊後に所領を持ったまま丹後の領主を勤めた人が日本史上にたった一人いたのです。細川忠興です。信長から丹後11万石を授り、関ヶ原の後で家康から豊後に6万石をもらい、同年中に又すぐ豊前39万5千石へ移封されているので、年代的には関ヶ原のあった1600年と確実に限定出来るわけです。これはまた忠興の夫人細川ガラシアが壮烈な死をとげた年ですから、「花世姫」がガラシア夫人をたたえる伝説として書かれたという可能性は十分あるわけです。

しかし勿論これだけでは偶然の一致かもしれませんから、次に「鉢かづき」も調べてみました。この話には異本が多いのですが、最もよく知られている御伽文庫版のをみますと、ヒロインの夫はこれも宰相と呼ばれていますが、結婚した報償に河内、大和、伊賀を帝からもらいます。大和の国というのは鎌倉から室町時代を通じて領主がなく、実際には興福寺の領地扱いだったところでした。戦国時代末の権力争いの結果、興福寺僧兵団の首領としてのし上った筒井順慶が信長から大和を与えられ、次に秀吉から河内をもらい、やがて両国を甥養子の筒井定次にゆずっています。この定次が「鉢かづき」の夫に相当するわけです。何故ならば、「鉢かづき」の宰相は三国をもらっておきながら、上国の大和は見むきもせず河内はしうとにやっ<sup>け</sup>てしまい、下国で小さい伊賀に御殿を建てて引越して行くからです。モデル探しに都合がいいことには、伊賀にもかつて実質的な領主がなく、鎌倉時代以来始めて統治した伊賀守が筒井定次であり、伊賀に（上野）城を建てた大名も彼一人です。彼の後には伊賀は隣の伊勢に併合されて独立権を失っています。もし「鉢かづき」が伝説であるとすれば、筒井定次には伝説化されるだけの逸話がなければなりません。日本歴史に於ては養父の順慶が有名ですが、定次も切支丹史上のヒーローなのです。徳川幕府に棄教を迫られて断固拒否した科で詰腹を切らされたときれ、いわば殉教大名です。しかも定次の夫人は細川ガラシアの姉であったとする歴史書もあり、ガラシアの弟を定次が養子にしたと記載した系図まであるほど、細川、明智両家と縁があります。

次に「姥皮」になりますと背景がもっと詳しく、15世紀初頭の応永時代、ヒロインのしうとの名前は、近江の豪族の佐々木の民部高吉で、夫が高吉となっています。応永時代に近江の守護を勤め民部小輔のタイトルを持っていたのは京極高満ですが、佐々木京極というこの名家では男性が代々、高<sup>たか</sup>な<sup>な</sup>がしと名乗っています。ここまで来た時にはすでにガラシア夫人と筒井定次と続いて、こちらも切支丹史に敏感になっていますから、佐々木京極氏と聞いて、切支丹関係で、浮んで来るのは、高吉と高知という天正慶長年間の大名父子です。しかも京極高吉は大名級で受洗した最初の一人、息子の高知は最後に受洗した人であり、その上1606年には高吉の娘マグダレナのクリスチャン葬式が伯母である淀君の逆鱗に触れて、切支丹教会の一大危機を起したことがあるのです。

なおヒロインの父は尾張の左衛門となっています。こちら辺は大分話を端折りますが、応永と年代を限ったのも道理、尾張の官領で左衛門<sup>のすけ</sup>佐<sup>し</sup>だ<sup>つ</sup>た斯<sup>し</sup>波<sup>は</sup>義<sup>ぎ</sup>重<sup>じゆう</sup>がモデルなのです。何故「姥皮」が応永と天正のモデルを組合せた二重構造になっているのかという点を追及しているうちに、斯波家と京極家の関係が浮んで来ました。切支丹大名京極ジョージ高知が夫のモデルなら、ヒロインに当るその夫人は誰かと調べてみると、信濃の毛利秀頼の娘と判りました。これは中国地方の毛利さんとは関係なく、なんと斯波義重数代の後えい<sup>い</sup>斯波義澄の息子が毛利秀頼なのです。京極高知はこの人の領土をむこととして相続しています。なお高知の最後の封地は細川忠興の旧領丹後なので、又、細川の名が出て来ます。「姥皮」の夫佐々木の十郎高吉はヒロインと結婚した褒<sup>ほ</sup>美<sup>み</sup>に越前の国と右兵衛督<sup>かみ</sup>という位を帝にもらいますが、これは応永年間の斯波義重が持っていた領地と位に一致しています。さて慶長時代のモデルは夫人も含めみんな受洗した切支丹大名ばかりですけれど、応永の斯波氏は勿論切支丹ではありません。この三つのお伽草子では、副人物まで全員が切支丹関係者で、花世姫モデルの細川ガラシア夫人のように、父明智光秀が信者でなかったことが明らかな場合には、わざわざ豊後守大友フランシスコ宗麟を振りかえて父に設定してあるくらいです。「姥皮」ヒロインの父にされた斯

波氏だけが無関係である筈がないと思って調べてみたら、やはり出て来ました。斯波義重直系の子孫で斯波義兼という人が、イエズス会士に尾張公と呼ばれ、高山ジュスト右近の父ダリオの居城に引取られて受洗していて、その家運の興亡についてのレポートがイエズス会士通信に載っています。

こうしてモデルの目星がついてから、その人達の一生とお伽草子三話のプロットとを比較してみますと、面白いように平行点が続出して来ました。これは日本の学者諸氏が御自分で読み比べて下されば判ることなのでここでは省かせて頂きますが、しかし特に注目すべきなのは三話の間でわざわざ設定を変えてある出来事でしょう。例えば私が年代的に一番遅いと判定した「姥皮」など、明らかに「花世姫」と「鉢かづき」の影響を受けているのに、男主人公の名前だけはフルネームを挙げています。「花世姫」と「鉢かづき」に於ける宰相という呼称は何に基いているのかという点で、私は長い間ひっかかっていました。偶然かどうか細川忠興も筒井定次も京極高知も四位の侍従で、それに相当する中国式官位が宰相なのですが、それだけではどうも根拠づけにならずに悩んでいました。ところが二、三年前に毎日新聞社主催の細川ガラシア展の写真カタログを見て、私はほとんど卒倒しそうになりました。細川忠興宛の褒状が現存していて、徳川家康の親筆でなんと宛名が「丹後宰相殿」となっているのです。越中守だった忠興はキリシタン文書では越中殿とも出ていますが、丹後の殿という表現も使われています。伊賀守で伊賀領主の筒井定次は当然伊賀宰相だった筈です。

その他、花世の父はお伽草子には珍しく三度も結婚するようになっていますが、これはモデル大友宗麟の一生と平行していて、悪役の継母はイエズス会士がバイブルの悪女ジェザベルになぞらえた二度目の妻に、宰相の縁戚に当たる最後の良い継母は宗麟の妻第三号でクリスチャンのジュリアに当り、その家庭の事情らしきものまで「花世姫」には書きこまれています。しうとの中納言は足利將軍義晴の四男である細川幽斉の背景を反映し、その妻のマリアをほめてあるなど、終始一貫しています。このことは英文の論文で詳しく発表しましたので、ここでは省略いたします。

さてこのお伽話三話がモデル小説であるとすれば、書く動機と必要な知識を備えていたのは当然切支丹関係者となります。私の計算では三話を通じて大名級の信者が少くとも八名いるのですが、そのうち九州の大友宗麟と、自宅で受洗したガラシア以外の六人を自ら洗礼したのはオルガンチノ神父です。この人はガラシア夫人から九州に逃げたいと相談を受けて、大騒ぎでなだめて思い止まらせたという報告も書いています。現地文化を尊重する宣教方針に切りかえた大巡回師バリニャーノが切支丹出版を始めてから、日本語の達人なオルガンチノは大いに協力していますが、もともとこの人はイタリアにいた頃聖母会に属していました。この会は青少年教育に力を注ぎ、お伽話やドラマを宗教教育に使うことを推奨していたのです。なお当時の日本ではあたかも説経節や絵解き比丘尼の全盛期で、バーバラ・ルーシュ教授の研究で定説が立った通り、熊野権現信仰などの宣教用にお伽草子が作られて、大衆の教育に貢献していました。日本人の切支丹関係者にも、もと説経法師のロレンゾを始め、名文で知られた養方軒パウロや、京極マグダレナの葬式で名説教をし平家物語を書き直した不于ファビアンなど、筆のたつ人達が揃っていました。

中でも私が「花世姫」の執筆者とみているのは、養方軒パウロの息子で洞院（又は法印）ピセンテという同宿です。この人が書いたと確認された物を見ますと、『サントスの御作業のうち抜き書』の数章、大友宗麟の息子セバスチャン親家の従弟シモン親虎に送った st.セバスチャン伝、宗麟の長男コンスタンチノ義統むねに与えた st.アリョーシャ伝など、殆んどが聖人の伝記伝説なのです。ガラシア夫人にラテン語を教えたとされるこのピセンテは、『伴天連記』中の「ルチア姫の話」として、女聖人ルチアの伝記を物語風にアレンジしたのを署名付で書いていますから、ガラシアの死の直後に「花世姫」としてフィクション化するアイデアが、ピセンテあたりから出た可能性は充分です。

但し「花世姫」だけでなく「鉢かづき」も「姥皮」も、日本人同宿だけでは絶対に書けなかった筈です。何故ならば、この三話にふんだんに盛りこまれている民俗的モチーフフォークロアだけではなく、プロットと型そのものがそっくりイ

タリア系シンデレラ・タイプの移植だからです。関敬吾氏が『日本昔話集成』で、姥皮タイプ昔話の先行文学としては、お伽草子の「鉢かづき」や「姥皮」しか見当たらないと、すでに確認して下さっています。この場合は口承伝統の昔話が文学的に進化して小説風にまとまるという民俗学の常識的プロセスとは逆になっている、とする私の仮説を裏付けて頂く結果になったようです。

まず<sup>タイプ</sup>型そのものについて見ますと、前世紀末（1892）に出版されたコックス女史の『シンデレラ』には341話が集成されており、1951年に出た『ザ・シンデレラ・サイクル』でルース女史が認めているように、後で集められた話は殆んどがコックス女史の挙げた<sup>タイプ</sup>型の変型のようなものです。それでコックスの集成をもとにして仮説を立てることが許されるわけですが、面白いことに341話のうち実に25%近くがイタリア・タイプなのです。しかもコックスで最古の話はストラポローラが物語風にかきた文学的シンデレラなのでイタリア型、しかも出版は1550年であり、1600年にガラシアが死んだ時日本に在任中だったイタリア系神父達は、すでに知っていた筈の人気高い本に載ったものなのです。

シンデレラと言いますと1697年刊のペロー版があまりにも有名になり、つまりは灰かぶりの継娘いじめと、ガラスの靴モチーフにからめて玉のこしをあしらった、女の子の出世話を連想してしまい勝ちです。しかし、それよりずっと古く、型としても完成し、昔話に定着しているのはイタリアン・タイプなのです。現代の民俗学インデックスではAT510Bとされているイタリア型では、継子でさえなく、靴も母代りの妖精女神も出て来ません。コックスがこれを二つに大別して<sup>キャットスキン</sup>猫皮型と<sup>キャップ・オ・ラツシズ</sup>蘭草頭布型と呼んだように、イタリア型では冠り物で変装したヒロインの逃避行がプロットの大部分を占めています。それにヒロインはほとんど必ず王女です。お伽草子では、「姥皮」の左衛門の娘をさえあえて姫と呼んでいる点も、イタリア型をふまえているとすれば当然すぎるほどです。

ペロー的な英仏型の靴シンデレラでは家庭内での継母による虐待が長いのですが、お伽草子ではイタリア的に継母はヒロインが家を出される原因を作

るに止まり、それきり二度と現れて来ません。三人のヒロインが他国へ放浪して行き、その地のプリンスと結ばれるまでに姥姿で潜伏しているのも、イタリア型そのままです。何よりもこの姥というのがイタリアにしかないモチーフなのです。これはマドンナの変現である場合も多いのですが、地域別にみると姥と超自然者による助力モチーフがイタリア型では64%、他の文化圏全体では37%だけと、圧倒的な差が見られます。変装手段についてはもっと差が大きく、イタリアの65%対その他の19%と、変装モチーフその物がイタリアの特徴ですし、その他の国々で変装がある場合72%が動物の皮なのに、イタリアでは木の冠り物が52%、姥の皮が13%となっています。特に姥の皮はイタリア以外の国ではコックス中たった一件しかみられません。

これは本当に老女の皮や死んだ母の皮又はその変形の衣をかぶったヒロインが姥姿になって逃げるもので、コックス中イタリアの七話がお伽草子「姥皮」と平行するプロットを示しています。特に「モナ・カタリナ」という話は女神（日本のは観音）の助力、姥皮ドレス、ヒロインが城の前で坐りこむ、盗み見した王が恋に陥る、大反対する家族がヒロインを見るなり感心して受け入れる、など「姥皮」とぴったり相応しています。

鉢かづきの木の冠り物はイタリア型にもっとも多くて、後で宝物を出す隠れ小箱から木片を綴ったドレスまで例話が数えきれないほどありますが、特に御伽文庫の「鉢かづき」にそっくりなのは二つです。「マリア・ウッド」では河に身投げしたヒロインが木のドレスで浮んで流れて行くうち紳士に拾われて女中にされ、やがて王子と結婚します。「コルク淑女」ではコルクの服ごと海に投げられたあげく、王子に助けられてお城へ連れて行かれます。山姥の衣をもらって姥姿になる花世姫の方は、イタリアの例話にこまかいモチーフまでよく似ています。殺す係に助けられるのが四話、姥の助力と忠言が三話。王子がのぞき見でみつけるのが三話。超自然者からの授かり物が二話あります。中でも一番似ているのは三話で「森のマリオン」では、姥姿のマドンナに頼まれてしらみ取りをし、人里への方向を教わり褒美をもらうのが同じです。「残虐な継母」では父王の留守に森に連れて行かれて殺されかけ歎願に成

功しますが、係の者達がそのため継母に殺されるどころや、森で出会った姥がヒロインを助けるところがそっくりです。「王の三人の娘」はもっと似ていて、森で助命を乞い猛獣じゆうに食べられるのを怖れているうち灯影をみつけ、たどりついた先が山の神（又は鬼）の家などと、まるでコピーしたような感じですか。しかも「生き物の匂いがするぞ」と鬼が言うのを山姥がなだめて、ヒロインが食べられないよう守ってくれるところまでそっくりです。

お伽草子三話を通じてイタリアのヴァリエーションと似ているのは全てキイ・モチーフとプロットなので、それを取除いてしまうと話として成立しなくなるほど重要な骨組みと肉付けの両方で、イタリア原話を下敷にしています。

なおキリスト教的要素がもっとはつきりからんでいる例も発見しました。「鉢かづき」には特に異本が多いのですが、中でも御巫みかなぎ氏の所有なので私が仮に御巫本と呼んでいるテキストは、筒井定次をモデルにした御伽文庫版とは筋も人物構成もまるで違っているため、とるに足りないイミテーションと考證されているようです。まず背景は京都で、ヒロインの父は左大臣になり、関白の長男である夫は内大臣になります。ヒロインの父は清原のゆきかたという名です。花世姫の父「もりたか」などを真似た「たか」を「かた」と書き間違えたとされていますが、当時の読者なら清原の「なにかた」と言われたらすぐぴんと来た筈です。京都の清原家では代々「賢」が男名につき、特に有名なのは後奈良天皇を教えた清原のぶかた宜賢です。これは実は細川幽斎の外祖父で彼を育てた人です。宜賢のぶかたの位だった侍従にちなんで小侍従と呼ばれた孫娘が、ガラシア夫人に洗礼を施したマリア小侍従で、「花世姫」にも顔を出していますが、このマリアが御巫本「鉢かづき」のモデルです。ヒロインの父が夫より高位の左大臣に昇るのも当然で、マリア小侍従の父清原かた頼賢は公卿中で最初に受洗した人です。

御巫本「鉢かづき」はヒロインの自殺未遂もなく、しかも処女妻であるような書き方であり、天神が助言するなど学者の家系清原家の娘で切支丹信者がモデルであって始めてうなずけるモチーフもあります。

また御巫本の筋は、明治時代に発見された隠れ切支丹のバイブル「天地始

りのこと」のメイン・テーマである、聖母マリアの一生と平行しているのです。処女懐胎して勘当された聖母が独り旅に出るので、貴種漂泊型のイタリアン・シンデレラ話になっている上に、昼夜を分たない恋人との人生論交換とか、ヒロインの学問的名声とか、御巫本「鉢かづき」と一致する特異なモチーフまで入っています。何よりも鉢の象徴的意味をはっきり説明しているのは御巫本だけで、恥を曝して歩く苦しさをヒロインは嘆くのですが、濁点の少ない現在刊本に恥は「はし」ではなく「はち」と書かれています。御巫本の筋立から、鉢かぶりの鉢(恥)はキリスト教の原罪であり、また小侍従が処女の誓を破って忠興の命令で結婚した破戒の罪を反映していることは明らかです。

以上、お伽草子三話がイタリア系切支丹神父の構成したイタリアン・シンデレラ型を使って、日本人同宿が執筆した、大名級信者讃美の伝説で、宣教用モデル小説である、という自説を簡単に御紹介させていただきました。

## 資料

### 1. モデルとなった人物の推定

「花世姫」	1600年(ガラシア死亡年)	
ヒロイン	花世	細川ガラシア夫人
夫	宰相・丹後守もりいえ	細川忠興
父	和田の一派豊後守もりたか	大友宗麟
しうと	中納言	細川幽斉
<small>みかなぎ</small> 御巫本「鉢かづき」	1601年頃(マリア小侍従の結婚後)	
ヒロイン	鉢かづき	清原マリア小侍従
夫	中将	松本因幡守
父	清原のゆきかた	清原頼賢 <small>かた</small>
御伽文庫「鉢かづき」	1608年(筒井定次切腹)	
ヒロイン	鉢かづき	ガラシアの姉で織田信長養女(もと荒木村次妻)
夫	宰相	筒井定次

父	備中守さねたか	荒木村重プラス織田信長
しうと	中将	筒井順慶
「うはかわ」	1612年(京極マグダレナ=高吉の娘 葬式)	
ヒロイン	名前なし	京極浅井マリア+毛利秀頼女
夫	佐々木の十郎たかよし	京極高吉+京極高知
父	成瀬の左衛門きよむね	斯波義重+織田信長
しうと	佐々木の民部たかきよ	京極高光+京極高清 (民部小輔) (高吉曾祖父)

## 2. 「花世姫」推定共著者

オルガンチノ神父 五畿内南蛮寺の主席 イタリア人  
 洞院 (又は法印) ビセンテ 日本人同宿 (神父ではない教会メンバー)  
 「サントスの御作業のうち抜き書」数章 高僧伝  
 「セント・セバスチャン伝」  
 「セント・アリョーシャ伝」  
 「伴天連記」中の「ルチア姫の話」サンタ・ルチア伝

御伽文庫「鉢かづき」 不干ファビアン 平家物語室町訳, 「妙貞問答」

## 3. 西欧のシンデレラ話(I. 靴型シンデレラ, II. <sup>キャット・スキン</sup>猫皮型, III. 藪草頭巾型(Cap O'Rushes))

シャルル・ペロー	「センドリオン」仏(ガラスの靴)	1697年
グリム	「アッシエンプッテル」独	1800年代
ストラパローラ	「Tredici Piacevoli Notti」	1550年
マリアン・コックス編	「シンデレラ」	1892年
アン・ルース	「ザ・シンデレラ・サイクル」	1951年

## 4. お伽草子との類似モチーフを持つイタリアの貴種漂泊型シンデレラ民話

「姥皮」——「モナ・カタリナ」他 6話

「鉢かづき」——「マリア・ウッド」  
 「コルク淑女」 } 他 多数

「森のマリオン」  
 「花世姫」——「残虐な継母」  
 「王の三人の娘」 } 他 12話

御巫本「鉢かづき」—隠れ切支丹バイブル「天地始りのこと」中サンタ・マリアの一生

(Chieko Mulhern 論文)

“Cinderella and the Jesuits: An Otogizoshi Cycle as Christian Literature,”  
*Monumenta Nipponica* (Winter 1979), pp.A 09—447

“Japanese Cinderella as a Pubertal Girl's Fantasy,” *Southern Folklore Quarterly*, No. 44, 1980, pp. 203—214

“Analysis of Cinderella Motifs Italian and Japanese,” *Asian Folklore Studies*, (Spring 1985)

### 討議要旨

Mulhern 氏から、ここに掲げた三話のほかにも、お伽草子にはかなり伝記的なものがあり、南欧系のキリシタンの影響が認められると補足があり、臼田氏から、大変刺激的な発表であったが、これらのお伽草子によりキリシタンの宣教の効果が上がったということはないように思われるので、ビセンテ等が宣教のために書いたということなど疑問を感じると質問があり、発表者から、1614年にキリシタンの布教が禁止されたので、教会としては受洗した人々の伝記を語り伝える必要があった、またお伽草子の対象とした婦女子の方が入信する者が多く、効果もあったのではないかと意見が述べられた。

また市古氏から、大変興味深く拝聴したが、お伽草子の成立は1600年以後とは考え難い。鉢かづきなどもそれ以前に成立しており、むしろ途中でつくり変える時にモデルとなる人物が当てられたかも知れない。またお伽草子の話が宣教に役立つと思えないので、宣教師らが書いたとするよりも、その話を聞いた日本の人が書いたという方が可能性があらうとコメントがあった。

なお、福田座長から、資料の作品名 “*Tredici Piacevoli Notti*” の意味について N. Spadavecchia 氏に質問があり、イタリア語で “13の楽しい夜” の意味であるという答があった。